

1911

大正元年

喜新劇



32-300



太郎冠者作

七口

彩雲閣發行



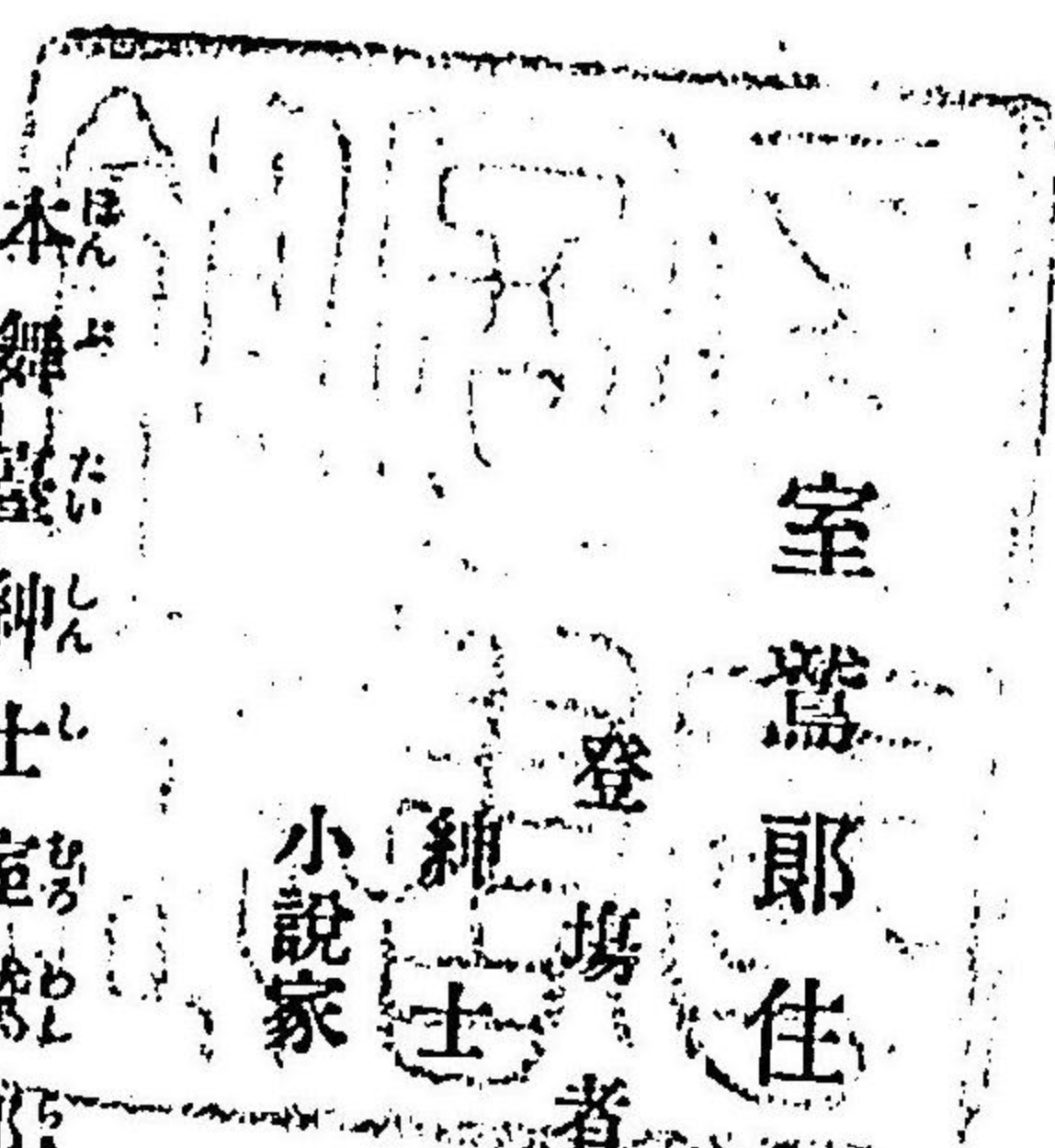
84

劇喜
新才セロ

(無断興行を許さず)

室鷺郎住宅の場

太郎冠者作



登場者

紳士

小説家

室鷺郎

すみれ

(本名勝芳雄)

同妻

召使

柄

お

音

宮

本舞臺紳士室鷺郎の住宅、美事なる西洋風の一室、正面
に出入口其兩側に硝子窓、上手の前と奥に入口、同じく

下手の前と奥に入口を設け、上手能き處にストープを
見せ、其前に物凄き程大なる頭付の虎の皮を敷き、天井
より美々敷電燈を下げ、壁に油繪を飾り、其他下手奥の
處に派手やかなる日本屏風、中央及奥に卓子、周圍に安
樂椅子、二脚、普通椅子、數脚を配置し、上手安樂椅子に室
鷲郎、年頃四十前後、色黒肥満、醜男、洋服姿、右手に懷劍を
握り、疲勞の體にて居眠る、夫とも知らず、今しも召使お
宮朝の掃除、最中の模様にて幕明く。

宮「オヤ」

〜 氣味の悪い事、昨夜の風で此部屋の中迄も埃だ

らけに成つてしまつた……。氣味が悪いと言へば家の旦那様はどうして、那麽に氣味の悪い人にお成りなすつたんだらう、丁度今から四月程前、奥様をお貰なさる迄は、毎晩のやうに悪友とか云ふお友達が、大勢入らして、丸で子供の様に面白さうに騒いでお出になつたお方が、轡音様をお貰ひなすつて、新婚旅行からお歸りになると間もなく、段々御様子が、お變りになつて、今迄ついで、晝間の中、家になんぞお在になつた例のないのに、此頃では丸で家から外へお出になつた事はなし、お友達が、お出になれば

宮「ア、驚いた、犬じやない人間の足がブラ下つて居るよ……誰だらう氣味が悪いね——昨夜から此の部屋には未だ誰も這入らないのに……」

こわく遠くから窺き見て、

宮「オヤ、旦那様が……アラ懐劍を握つたまんま。」

だんく近寄つて氣味悪さうに、

宮「旦那様……旦那様……モウ七時でムいます……旦那様。」

揺り起されたる室鴛郎、突然懐劍逆手に振上げ、

室「曲者ッ！」

お宮に向つて立上る、お宮驚き狼狽ながら、

宮「私でムい升。」

鴛郎お宮を見詰め安心の思入、再び安樂椅子にドツカリ座し、

室「ナンダお宮か！」

宮「何うか遊ばしましたか？」

室「ウン、確かに遊ばしたに違いない、お前にも遊ばした様に見えるか？」

宮「ハイ、なんだかお顔の色と云ひお目の色と云ひ、此頃の御

容子は餘程御心配の事でも有りさうに……』

室『有りさうではない、有るのだ。お前も知つての通り家内を貰ふ前迄は何事も無頓着で居た俺が、此頃では晝となく夜となく、別して日が暮れてからは只々疑の雲に包まれて、到底枕を高くする事が出来んのだ。』

宮『あれでも、低ければモウ一ツ西洋枕を重ねませうか。』

室『さうじやない、安心が出来んと云ふのだ。ア、く、社會一切の秘密を包む夜、罪深き夜、悪むべき夜、夜の無い國へ行きたいなア。』

宮『へー、夜がお嫌で御座いますか。』

室『ソノ嫌いな夜の魔力に打勝うと昨夜も終夜奮闘の末、やうく東が白んで来たので心も緩み疲も出たが、ツヒ、ウトくする中に案の條怪しい奴が這入つて来たから只一突と思つたら……ナンの事だ、矢張夢を見て居たのだ。』

宮『大層危険な夢でムいますねー。』

室『それはさうと奥さんはどうした。』

宮『只今お目覺でムいます。』

室『さうか夫れでやうく一安心では是から寝ると仕やう

か……。」

立上り上手前の入口に向ひながら、

室「然し昨夜は無事に済んだものゝ、又今夜が案じられるて

……ア、思ふまい〜。」

頭を押へ煩悶しながら入る。

お宮暫時呆れて見送り、

宮「何といふ事だらう、奥様がお起になりますといへば、夫で

は是から寐やうとは……這麼のが此頃流行のか知らん。

私はあんな御亭主は嫌だわ、然し一體全體どう爲すつた

んだらう、別段何の御心配も無いのに那麼にお焼きなさ

るのは……あれがハイカラのチン〜とでも云ふのか知

らん、本統に氣味が悪いわね〜。」

又々掃除を續ける中、下手前の入口より室夫人、轡音、二

百三高地白のリボン品よき服装、凡て學校出明治式新

夫人、何やらん憂の容子にて入來り安樂椅子に座す。

宮「奥様お早うムいます。」

新「ハイ、アノ昨夜仕掛けた縫取の籠を持って來ておくれ、御

膳前に仕上げて仕舞ひたいから。」

お宮後の卓子に置きたる西洋風の仕事籠を持来る。

鞆音中よりハンケチを取り出し縫取を始める。此内お

宮つらく夫人の容子を見て、

宮「奥様、何處ぞお加減でもお悪うムい升か。」

鞆「なせ？」

宮「なせと申して此頃は何となく御顔色もお悪し、御氣分も

御引立にならないやうでムいますか……。」

鞆「氣分も引立たない譯ぢやないか。」

宮「どういふ譯でムいます。」

鞆「どういふ譯と言つて、お前だから話すけれども、妾が此所

へ来て暫の間は旦那様もそれはく御親切にして下さ

つて世の中に妾程仕合せな女が又と有らうかと思つて

居たが、段々月日が経つと御容子が變つて来て、此頃では

時々恐い顔をしては妾を御睨みになつたり、妾が犬の額

を撫でたと云つては、御怒になり、庭の莖が可愛と云つた

ら御機嫌が悪くなつたり、夫れに近頃は毎晩家にお出に

なる事はなし、本統に男心と秋の空とはこんなことかと

妾は毎日泣かない日は無いわ。」

宮「アラ、奥様秋の空どころではムいませんよ、炎天でムいませよ。」

瓶「炎天とは？」

宮「秋どころか、暑中も暑中百度以上でムいませよ。」

瓶「何が百度以上？」

宮「旦那様が。」

瓶「そんなに御熱が有るものかね、人間普通の体温は三十七度と極つて居るわ。」

宮「体温は三十七度でも、旦那様の御情愛の熱は確かに百度

以上でムいませよ。」

瓶「夫れなら何だつて毎晩家をお明けになるんだらう。」

宮「家なんぞどうしてお明けになるもんですか。」

瓶「だつて現在昨夜も一昨日の晩もお歸りが無いぢやないか。」

宮「お歸が無い筈でムいませ、始つから外へお出にならな

瓶「へ、では何處にお出になつたの。」

宮「家中に居らつしやいましたのですよ。」

「家中に？」

宮「アラ奥様貴女御存じないのでムいますか、旦那様は平常から御疝の強い處へ此頃あんまり奥様がお可愛なので、人並外れたチンクにお成りあそばしたものと見えましてね、毎晩奥様が御寝になりましたから御部屋の廻をピストルと懐劔を持って夜中番をしてお在になるのでムいますよ。」

「エーッ？ピストルと懐劔？オ、氣味の悪い。何だつてそんなものを持つて部屋の近所をお廻りになるのなら

う。」

宮「それは何か怪しい事でも有ると思召して居らつしやるからでムいませうが、彼の分では御用心をあそばさない」と何を爲さるか分りませんよ。」

「だつて妾は何も悪い事をした覺もないのに、何だつてそんなに……。」

宮「それが妾の思ひますには餘り旦那様がお惚れ遊ばした處へ、何か變な事でもお聞になつて、夫れからチーット變にお成になつたのでムいませうよ。」

鞆「妾はそれ所では有りはしない、今日は旦那様の御誕生だと云ふから御婚禮の時いたいた此白綸子のハンケチに内證でハートを縫取して、旦那様のお名前と妾の名とを一字づゝ入れて、御祝の印に吃驚させて上げやうと思つて居る位なのに、妾の心をお疑なさるとは何といふ御悼はしい事だらうねー。』

此内上手前の入口より室鴛郎拔足にて出来り鞆音の容子を窺ふを、お宮フト心付き鞆音の袖を引きて知らせる。鞆音狼狽て、手巾を仕事籠の内へ隠す。

鞆「お早うムいます。』

挨拶して席を譲り下手の安樂椅子に座せば、鴛郎上手に座し、無言の儘鞆音を見詰める。鞆音氣味悪さうにお宮と顔見合せてモヂくする。お宮手付にてピストルと懐劍の事を注意する。

室「鞆音、お前は今何か手に持つて居た様だつたな。』

鞆「ハイ、イエ別に……。』

室「イヤ何か隠したらう。』

鞆「べ、別に何も隠しはいたしません。』

室「イヤ何か秘密の物を隠したらうが。」

鞆音「お宮と顔を見合す。」

宮「旦那様奥様は何にも御隠しなさる様なものは御持では
ムいません。」

室「お前には尋ねん、臺所へ行つて釜の底でも磨いて居れ。」

宮「お釜は奇麗になつて居ります。」

室「夫れなら汚して来い。」

宮「かしこまりました。」

鞆音「に用心する様注意しつゝ、下手奥の口へ入る。」

二〇

二一

室「サア、鞆音何を隠したか云ふて呉れ、確かにお前はハンケ
チの様なものを持つて居たに違ひない。」

アト心付きたる思入にて、

室「アツ！鞆音、手巾で思出したが、吾々が結婚した時お前に
渡した白綸子のハンケチは持つて居るだらうな。」

鞆音「ハイ、持つて居ります。」

室「何故アノ手巾をお前に渡したか、其謂因縁を覚えて居る
か。」

鞆音「アレはたしか貴郎の御祖母様の御遺物で、御祖母様の御

信仰しんぎょうなされて居ゐた宮みやのヒヨットコの下着したぎで有あつた白しろ綸りん子の片袖かたそでを……。」

室むろ「ヒヨットコでは無い巫女みこの下着したぎだ。」

瓶びん「左様さやうでムいますか、何でも其そのヒヨットコとか巫女みことかの言葉ことばによれば、あの片かたは夫婦ふうふの愛情あいじやうを繋合つなぎあせるお守まもりだと仰おつしやいましたわね。」

室むろ「其その通りだ、夫程それほど大切な品しなだから、お前まえも定めし大事たいじにして居ゐるだらう、持もつて居ゐるなら一寸ちよつとお見みせ。」

瓶びん「今いまですか？」

室むろ「今いますぐ見みせてくれ。」

瓶びん「今いまは少し都合ごうごが悪わるう御座ござんすからモウ少し後あとで……。」

鶯うぐいす郎らう立た上あり、

室むろ「ナニ都合ごうごがわるい？是こりや怪けしからん、彼あの手巾てぬぐいを見みせるに都合ごうごが悪わるいとは少し變へんではないか。思おもふにお前まえは失なしたんだらう、それ共とも誰たれかに遣やつたのか。」

瓶びん「誰たれがあんな手巾てぬぐいを遣やるもんですか、遣やつた處ところで鼻はなもかめないぢやありませんか、ト云いつて首くびへ巻まけば坊ぼうさんぢみるでせう。」

室「悪口を云はずに出して見せろ。」

柄「だつてモウ一時間ばかりしなくつちや、少し都合が悪い
んですもの。」

室「さては俺の疑念通り誰か人に遣つたのだな、夫婦の愛の
印となる彼の手巾を人に遣るとは……いよ、伊屋剛藏
氏の翻譯したシヨツペンハウエルの婦人論は確實だな
……。」

無念の思入にて柄音を睨む。

室「柄音彼の手巾を今出さねばお前は俺を捨てるのだぞッ

！

柄音は夫の見幕に驚き、

柄「出しますすよ、そんなにお怒りになるなら仕方がない
から今出しますよ。」

傍の仕事籠の中より以前の手巾を出して夫に渡す。

柄「へエ白綾子のハンケチ、」

室手に取つて改めながら、

室「オヤッ！何だ。ハートが一ツ！中に「ソ」の字と「ト」の字の
縫取！」

鞆「實は今日貴郎の誕生日の御祝に、夫婦の愛の御守へ此縫
取をして上げたら、お喜になるだらうと内證で仕て居た
所なのです。」

室「でも此ハートに「ワ」の字と「ト」の字は？」

鞆（恥かしさうに）「鶯郎と……鞆音とは……一ツ心といふ譯よ。」
袖にて顔を隠す、鶯郎今迄の見暮は何處へやら、相好を
崩し喜と安心の思入にて力なげにドツと座す。

室「ウン然うか……ナール程……さうとは知らずに何の事だ馬
鹿馬鹿しい……併し俺は餘程常識以上になつて來たな。」

鞆「一體どうか爲すつたのですか。」

室「確かにどうか爲すつたに違ない、俺の頭は迷の雲に包ま
れ、胸の中は嫉妬の炎に焼かれて居るのだ。」

鞆「一體どういふ譯でそんなにお焼になるのです。」

室「どういふ譯か自分にも判然分らんが、コンな變手古な性
質になつたソモくの動機は、先頃から戀愛小説を讀ん
だり戀愛劇を見たり、遂には進んで婦人の天性に就て研
究の必要を感じて、伊屋剛藏氏の譯された「婦人論」を讀ん
だ結果だらう。」

「伊屋剛藏とかいふ人がドンな事を書きましたか、は知りませんが、戀愛小説だの戀愛劇などを御覧になつたら、猶更ら女の情の深い事がお分りになりませう。」
「それがさうは行かん、元來俺は女などは大嫌で、お前を貰ふ迄は全く書生流の生活をして來たのだが、フトした縁でお前と結婚して先頃新婚旅行に伊香保へ行つた時、お前の見て居た小説本を退屈のあまりに一寸手に取つて見ると、ヤレ惚れたの腫れたのといふ所謂戀愛小説だ。又其時は俺が生れて初めて女に對する愛情を知つた時

であつたから、同時に女が男に對する愛情も知りたくなり、引續いていろく小説を讀んだり戀愛劇を見たりする中に、如何に我邦の明治式婦女子等の男に惚れやすいのと、又如何に其惚れる理由の薄弱なるのに驚かされたのだ。サアさうなると第一に浮で來るのは俺の女房即ちお前も女だから然かもツヒ此頃迄は、目下社會の一大問題たる例の海老茶の一人で、やれ星よ董よ繪葉書よとトチ狂ひは爲なかつたか。結婚前既に心を動かした角帽金ボタンでも有りはせなんだか。其美しい目で俺よ

りも色白な鼻筋の透つた、所謂婦女子の理想とする男に
一種の情を以て見た事はなかつたか。其愛らしい口元
からイヤヨ式テヨダワ式の言語を以て神聖のラヅを論
じはせなんだかと思ふと、考へたばかりでも俺の心は麻
の如く亂れて今ではオセロの再来と成つたのだ。』
鞆「へエ、夫れはお氣の毒様ですわね——成程妾は此間迄學校
に居て規則だから海老茶の袴も穿きましたすが、男の人で
知つて居るのはお父様に親類の方と先生だけですわ、そ
れにイヤヨ式、テヨダワ式の言語で神聖の何とかかんと

か仰しやつても妾には分らないわ。』
室「イヤ分るまい、決してお前には分らないと思ひたいが、俺
は女の天性を研究すればする程、女の言葉が信じられん
のだ。』

鞆「アラ妾の言葉も御信用下さらないの、』
室「お前はかりぢやない、女といふもの全體の言葉が信用出
來んのだ。其譯は之を見ろ。』

ポケットより雑誌様の物を取り出し、
室「是が伊屋剛藏氏翻譯の婦人論だ。此中に婦人の天性を

論じて斯う書いてある。」

雑誌を読む。

「凡ての動物は己を保護する武器を具ふ、例へば獅子は鋭き歯と爪とを具へ、象は鼻を具へ、牛は角を具へ、鳥賊は黒汁を吐いて姿を隠し、豚は尻尾を以て蠅を逐ふ、即ち天は婦人に保護防衛の利器として興ふるに詐偽の術を以てせり、天は男子に腕力と理解力を興ふるが如く、婦人に詐偽の性質を興へたり、伶俐なる婦人も愚鈍なる婦人も、詐偽の術を使用して巧みに人を欺くは、蓋し天性の然らしむ

る所なり。」

と書いてある。どうだ！是でも男子が婦人等の言語を信じられるかッ？」

「何だか妾には分りませんから御勝手に爲さいまし。」

室「第一、俺の女房たるお前の名前から怪しい。」

「何故怪しうムいます。」

室「何故といつて第一人の細君たる者が頼音つ(友寢)とは何たる名前か、以來は断然トモオキとか、トモオキとか云つてトモオキは止めて貰はう。」

鞆「御自身の家内を友達と仰しやるのは變ですわ。」

室「何が變か。昔から年寄になると茶飲友達とも云ふわ。」

フト反古紙の絲卷に目を付け、

室「一寸其絲卷を見せろ。」

鞆「何故です。」

室「何故でもいゝ、其中の紙が見たいのだ。」

鞆「之を解いては大變です。」

室「大變？それ見ろ、反古と見かけ何か秘密の手紙でも……」

鞆「馬鹿な事を仰しやいましよ、中は何でも後で絲を卷くの

が大變ですよ。」

室「構はん！小聲にて詐偽的天性く」

無理に取上げて、絲卷を鞆音に軽く持たせ己は絲の先

を持ち上手の端に走り行き畏ろしき顔をして鞆音を

睨みながら手繰る、漸やく絲を去り走り寄りて絲卷に

使ひたる古新聞をあはて、取上げ叮嚀に改めて讀む。

室「ナニ專賣特許、鼻を高くする器械。鼻の低き人は試し給

へ速に高くなり自然に形を好くす。定價一圓九十錢。」

思はず自分の鼻を擦りながら讀み、腹立しげに投出し、

室「エ、あてつけるな！」

輛「それ御覽遊ばせな。」

室「御覽遊ばせ？自分の鼻が見られるかッ！ア、もう何だか分らん。」

頭を押へ煩悶しながら、上手正面の窓の所へ行き外を見暫して何か目に着きたる思入にて、アツと一聲顔色變りヅカくと輛音の側に來り、

室「コラ輛音ではない輛立！」

絲卷に絲を卷直しつゝありし輛音の片腕を握る。

輛「ア、吃驚した。」

室「イヤ俺の方が吃驚したのだ、サア一寸彼の窓の處へ來い。」

輛「何が見えますか。」

室「見えるか見えぬか一寸來て見ろ。」

輛音を窓の所へ引行き、

室「サア見えるだらう。」

輛「何が？」

室「何がとは怪しからん、彼の向の家の一階の窓から此方を見て居るハイカラの怪物が見えぬと云ふのかッ！」

鞆音不思議さうに外を見て、

鞆「ナル程、變な男が居りますね。」

室「エ知らばつくれるな、お前は彼の男と懇意だらう。」

鞆「イ、エ今見るのが始めてだわ。」

室「甘く云ふな、彼の男の此方を見る目付を、彼の目は確かに安全な目では無い、否、最も危険な目だぞ。」

鞆「へー？トランプオームでせうか？」

室「瞞着すな。アツ！窓の外に赤い薔薇を澤山置いて……オヤ煙草を吸ひ初めた……アツ！然かも左の窓から、」

鞆「それがどうかしましたか。」

室「分つたく、確かに分つた。」

鞆「何が分りましたの？」

室「鞆立！彼のハイカラの仕て居る事は皆お前に對する愛の無線電信だ。」

鞆「愛の無線電信？」

室「外國の書物にも書いてある。白き花は潔白を表はし、黄は嫉妬を示し、青は望を意味し、赤きは男女の愛情を云ふのだ、其愛情を外に出し煙草に火を付けては燃ゆると讀

ませ、右の窓を閉ぢて左を開けるは心臓即ち心を打明け
る、言替れば燃る心を打明けてお前に愛情を表するとい
ふ謎なのだ！』

榎『何だか少しも分りませんわ。』

室『エ、分らんとは云はせんぞ、我家に賊が入込んでも知らぬ間は何一ツ盗まれぬ時と同じ様に、東京市民の全體が悉くお前の手を握らうとも悟らぬ内は知らぬが佛だ、今は鶯郎が一身の平和は寸断分裂、電車の響も自分を嘲り豆腐屋の聲も俺を罵るかと思はれるわ。』

榎『貴郎本統にお疑ひなさるのですか？』

室『冗談に疑はれるか。』

榎『アラ妾にみだらな事があるやうに？』

室『妾にみだらな事とは能く言つた、若し日輪耳あらば耳を撮んで顔をそむけ……(鼻を撮んで云ふ)』

榎『鼻でせう！』

室『さうだ鼻だ、鼻を撮んで顔をそむけ、又月輪に眼があらば……。』

榎『眼を隠して見まいと仰しやるのでせう。』

鶯郎先を越されて目許りバチクリ。

輒音立腹の思入にて、暫時鶯郎を睨み突然大聲にて、

「他人が妾を愛したら夫れが妾の罪ですかッ？！妾にやモ

ウ何だか分らないわ。」

泣きながら下手前の入口へ入る。

鶯郎は輒音を見送り、

室「涙！男子をして道理を枉げさせる女の涙！婦人の秘訣

を知つた室鶯郎は最早涙で左右は出来ぬぞ……さうだ此

上は断然轉居するに限る、向側に家が有るからこんな心

配も起るのだ……是から家を探しに出掛けやう。」

上手奥の入口に入らんとし、フト心付たる體にて留り、

室「待てよ、留守中何を爲るか知れん、誰か見張りを……さうだ

お宮を買収して……名案く。」

呼鈴を鳴らせど誰も來ず、腹立しき思入にて二三度強

く鳴らせば下手奥の入口より漸くお宮登場す。

宮「お呼になりましたか。」

室「ナゼ早く來ないのか。」

宮「只今お釜を汚して居りましたので……。」

室「(小聲にて)毒舌は婦人の天性!」(お宮に向ひ態と笑を浮べ)

室「イヤお前は相變らず正直だ、雇人も多く居るが、さすがに
お前だけ別者だよ、實は俺もお前には少し餘計に給料も
やりたく思ふが他の雇人との權衡上さうも行かんで今
の儘に爲てあるが、其代り何か特別の働が有れば又特別
の報酬も出来るのだが、何と五圓ばかり稼がんか。」

宮「でも私なんぞに……」(恥かしさうに云ふ)

室「(小聲にて)自惚は婦人の天性! (お宮に向ひ)お前でなければ

出来ぬのだ、といふのは今から俺は一二時間外出するから
其間お前は彼の窓の所で向側に居るハイカラの舉動
に眼を着け同時に奥さんにも眼を着けて俺が歸つたら
見た事聞いた事を一々報告をしろ、サア此所にお在で。」
椅子を窓の側に置き、お宮を引來り無理に坐らす。

宮「ダツて一度に兩方へ目を着ける事は……」

室「エ、二ツ有るから一ツ宛着けて居れば可いのだ。」

宮「蟹の目では有るまいし、私の目は……」

室「八方睨みも有る世の中だ、グツグツ云はずに坐つて居れ

五圓になるのだ。』

宮『でも私が奥様に……』(モヂくしながら云ふ)

室『五圓！五圓！』

言續けながら上手奥の入口に入る。

宮『サア大變だ、どうなるんだらうね——』

向側の二階を見て、

宮『オヤ彼れだよ。旦那様のお氣になさるハイカラは……成程旦那様よりは餘程様子が好いわ……然し何の事だか分からないが、此儘奥様に黙つて居ては濟まないわね……さう

四六

四七

だ、女は女の肩を持つのが當り前だから奥様に申上げやう。』

座りしまゝ下手に向ひ大聲にて、

宮『奥様——』

聲を聞きつけ、下手前の入口より輦音手紙片手に出來る。

輦『何を爲て居るんだよ。』

宮『奥様大變でムいますよ、今旦那様が何處へかお出掛になります時にね、私に五圓遣るから、俺の留守中向のハネカ

ラと奥様の御容子を見張つて居ると、無理に私を此所へ
押付けてお出になりましたしてムいますよ。』

柄「アラ嫌だ、妾に探偵なんぞ御付けなすつて、此分で行つた
ら仕舞には殺されるかも知れないね……妾も今丁度お前
を頼まうと思つて居た處だつたのよ、御苦勞だが此手紙
を彼の向の窓から首を出して居る方に届けてお呉れ。』
ト手紙を渡す、宮不思議さうに、

宮「アラそんなら奥様は矢ッ張り彼の方を御存じなんです
か。』

柄「何を云つてるんだよ、何でも能いから旦那様のお歸りに
ならない前に早く行つて来ておくれといつたら。』

宮「かしこまりました。』

下手奥の入口に向ひながら口の内にて、

宮「旦那様がお疑りなさるのもまんざら御無理ぢや無いか
知らん。』

此内柄音上手の椅子に坐す。

柄「早く行つてお出よ。』

宮「只今参ります。』

いぶかりながら出行く。

瓶「何といふ因果な事だらう、ピストルと懐剣を持つて、オセロの再来だなんて、恐ろしい顔をしては妾をお疑りなさるんだもの。夫が妻に嫉妬を起すとは、世の中が進歩するのにも善し悪しだわね——然しお向のハイカラさんもハイカラさんだわ、如何にあつかましの流行つて無闇に愛情を發表されては夫こそ難有迷惑だわ。」
此時下手奥の入口より足音高くお宮入来る。

宮「奥様、大變く。」

五〇

瓶「何が大變なの？」

宮「何がつて今の御手紙をお向の方に差上げましたら、何の事だかちつとも分りませんから、お目に掛けて承はりませうつて、お出になりましたよ。」

瓶「エーッ！此處へ来るの？」

宮「いくら御断申しても是非伺ひますつて、今靴を穿いてお出になりますよ。」

瓶「サア大變だね、若し此處へお出なすつて居る所へ、旦那様がお歸りにならうものなら、夫こそ命懸だよ。」

五一

宮『でも先はそんな事は知りませんから、参りますよ。』

頼『困ったねー仕方が無いからお出なすつたら居ないと云

つて断つておくれよ。』

此時表の方に足音聞ゆる。

宮『モウ参りましたよ、御逃げ遊ばせよ。』

兩人狼狽、頼音は一旦上手奥の口に入り、又馳出で前の口に入る。此時正面の入口より小説家すみれ(本名勝芳雄)年頃三十前後頭髪を長目に刈り嫌味澤山な洋装、但し洋服少々抜衣紋、天ぶら金鎖同じく少々ツンツル

テンのズボン、其他萬事當時流行和製ハイカラ、遠見紳士の着付宜敷少しく古びたる中折帽子を被り、右の手に柄になき新しき櫻のステツキ、左に白メリヤスの手袋を持って登場。

勝『イヤ只今は飛んだ失禮をいたしました、奥様はお在です

か知らん。』

お宮は勝を成るべく入れぬやうに入口の所に立ちたる儘。

宮『アノウ何でムい升……只今一寸ソノ……何でムいましてね。』

勝「何でもいますか？」

宮「アノウ一寸御出掛になりましたが。」

勝「左様でムいますか、宜しうムいます、どうせ閑でムいますから御歸り迄お待ち申しませう。」

宮「ソレが何時お歸りに成るか知れませんか……」

勝「イエ私は何時間でもお待ち申すから、何卒御構ひなく。」

お宮の留めるのも聞かずツカ／＼入来り下手の安樂椅子に座す、お宮呆れて上手前の入口に入る、ふとにて勝一人容子振りて獨白。

勝「世の中には随分不思議な事があるものだな、かねて近所で美人と聞いた當家の奥さんから、お目にかゝつた事もない僕の所へお手紙が来て、何事かと讀で見ると何だか丸で分らない……實に妙だて……」

ポケットより手紙を取り出し、

勝「是だ(讀む)エ、取急ぎ一筆申上候、承れば赤き薔薇も煙草も左の窓も夫々種々深き意味ある由には候らへども、御親切も過ぎれば却て此身の害とも相成候間、至急薔薇も御取除き下され度、煙草も御見合せ相願度、又左の窓は必

す御開き下さる間敷候、斯く申上候上は何事も御分りと
存候まゝ、態と名前は記し申さず候かしく……何の事だか
些少も分らない……薔薇に煙草に左の窓……三題漸か知ら
ん、ソレとも奥さんは少し變なのかな……」

勝の思案最中上手前の入口より轎音お宮兩人困つた
思入にて出で来る。勝は轎音を見てあわて、手紙を
仕舞ひ、椅子より離れて叮嚀に挨拶する、轎音お宮に目
配して正面入口を見張さす。

轎「貴郎は……」

勝「ハイ私は只今お手紙を頂きました、お向に居ります勝芳
雄と申す者でムいます。」

轎「左様でムいますか、どうして此所へお出になりましたか。」
勝「歩行いて参りました。」

轎「イエ、アノウ……何か御用で……？」

勝「ハイ實は御手紙を拜見いたしました、何方がお書に成
つたのか分りませんが、お女中に伺ひました處奥さんか
らと承りましたので、十五六度も讀みましたが何分充分
分りませんゆへ……」

頼「私は字が下手でムいますから……」

勝「イエ文字は御立派でございませうが……」

頼「文が拙なくつて……」

勝「イ、エ拙ないにもお上手にも、丸で御趣意が分りません

から承りに参りましたので……ハイ。」

頼「あれだけ申せば何事もお分りでムいませう。」

勝「ソレが甚だ失禮ながら、何の事だか分りませんので……」

頼「アラ、しかし赤い蓄薇は御承知でムいませう。」(恥かしさうにいふ)

勝「少しく氣味悪き思入にて、

時「赤い蓄薇！あれは元來私がい たつて草花を好きますの

で、先夜も縁日で求めまして御覽の通り窓の所へ置きま

しては毎日眺めて居りますが彼の蓄薇がどうかいたし

ましたか？」

頼「へイ？でも貴郎煙草を御吸ひになるんですもの。」

勝「いよ、く氣味悪き思入にて、

勝「へー？私は非常に煙草が好きで、毎日煙草を吸ひますが、

まさか其煙りが此所までは参りますまい……」

新「ソレハ参りは致しません、左の窓を開けて御吸になる
もんですから……」

勝「左の窓？……彼の窓は私の居間の窓で、右の方は寢室に使
いますから、自然衣類杯を着換へます時外へ見えると失
禮と存じまして、朝晩だけ閉めますが……」

新「でも是非共右の方をお開け下さいましたな。」

勝「へー？一體如何いふ譯でソんな事を仰しやるのですか。」

新「でも皆何かの無線電信でムいませう。」

勝「無線電信！サア愈々分らなく成つて来て、殆んど困りま

したな。」

新「困るのは私で、貴郎の薔薇や煙草や窓の意味が私共の家
庭に大風波を起して居りますから、是非共今からお止が
願ひたうムい升。」

勝「何だか分りませんが、畏りました、手前の方では別段何の
意味もムいませんから、止せと仰しやるなら止しもいた
しませうが、實に不思議千萬ですな。」

新「アラ別に何も意味はないのですか？」

勝「何にも意味などは有りませんから、不思議千萬に存じま

すので……」

「ア、ラ、マ、ア、何とも申譯がムいません……實にどうも何とも

……」

急に轎音が詫れば勝も烟に巻かれて只ビヨコ〜御
辭儀する。

「實は耻をお話し爲なければお分りに成りますまいが、手
前共の主人は夫は〜疑ひ深い性質でムいまして、別し
て近頃は少し烈敷になりました處が先刻左の窓から貴郎
の煙草を吸つて薔薇を眺めて居らつしやるのを見まし

六二

六三

て、彼れは燃ゆる心を打明けて愛情を表する謎だとか何
とか申しまして、何か私が貴郎と人知れず御懇意にでもい
たして居りますやうに申ますから、ソレで實は只今手紙
を差上りましたのでムい升よ。」

「へー、それは又非常な御疑深い方ですな〜。」

「エ、〜丸でお話しになりますの、ソレに此頃はポケ
ツにピストルと懐劍を持つて居りまして、何かと申すと
虎の様な恐い顔をしては「俺はオセロの再来となつた」と
申ましては人を睨みますの。」

勝「へ！……イヤ断然齋薇も引込めますし、左の窓は釘づけに
いたし升、非常に危険です。しかし嫉妬心と申せば私も御
安心の爲に懺悔を致しますが、實は私は號をすみれと申
小説家でムいますが、何分御承知の通り變つた小説の種
もムいませんし、且又此頃は、同業者が殖ゑますので思は
しいこともムいませんから少く弱つて居り升とフトし
た縁で先頃或る後家と縁談が整ひましたが、何が扱私よ
り年が十四五も上、ソレに體は丸で熊のやうな恰好で怪
物同様でムいますが兎に角廿五萬圓も有る蝙蝠傘の問

屋の後家でムい升から、目を眠つて承知いたしました處
が、まだ婚禮もいたしません内から、イヤハヤそれはく
非常なチンクで、毎日私の下宿へ參らぬ日はムいません
し、又參りますたんびに、ステッキか傘をみやげに持つて
參りましたは「お前さんは何處へ行くにも必ずステッキ
か傘を一本づゝ肌身離さず持つて居て、妾を忘れて下さ
るな、若し一本でも失したら婚禮などは愚な事、生かして
は置きませんよ」と睨みますので、失禮とは存じながら何
處へでも斯うやつてステッキを一本づゝ持つて參るや

うな譯で……是で宅には傘が三十五本に、ステッキが四十
七本ムいますやうな次第で……二十五萬圓は結構ですが
實に嫉妬心には閉口致して居りますよ。」

柄「へー貴郎の方は熊で入らつしやいますか、お察し申す
ね。」

此時正面入口よりお宮狼狽て、入來り、

宮「奥様お歸でムい升よ、大變く。」

柄「へッ！旦那様のお歸り？サア大變！貴郎は此所にぐづ
ぐづ仕て居らつしやるとお命が危うムい升よ。」

六六

勝「オセロさんのお歸り！？是は大變だ、ド、何處から逃げま
せうか。」

宮「此方へ入らつしやいました、チヨイト貴郎。」

三人きりく室内を馳廻り、遂に勝お宮に導かれステ
ツキを忘れたる儘、下手奥の入口より逃げる。此内柄
音一人心配氣に下手奥の入口並に正面入口より首差
延ばして氣遣ふ、お宮下手奥の入口より馳入り安心の
思入にて、

宮「奥様御安心遊ばせ。」

六七

鶯「トウ／＼行ってしまいましたねが、本統にモウ少しの所でム
いました……？ 誰が何處へ何しに行つたのか、モウ少しの
所でドウなつたのか。」

宮「ソレはあの……」

輒「お前は黙つてお出でなさいよ。」

鶯「イヤお前はおしやべりよ。」

宮「ソレは何でも無いのでムい升よ。」

鶯「コラ／＼、お宮……お前はモウ忘れたのか……ホラ……」

輒音に見えぬやうに右の手を振つて五圓のことを注

七〇

意する。

七一

宮「アラお聞きになつてもつまらない事でムいますよ、實は
只今外へ花屋が通りましたのを奥様が御覽になつて、早
く呼で来いと仰しやいましたから、馳出して参りました
が私の足の方が遅いもんですから、トウ／＼行つてしま
いましたねが、本統にモウ少しの所でムいましたと申しま
したの。」

鶯「花屋が！ 何の事だ、ソレならソレと何故早く云はぬのだ。」
輒「ダツて云ふ暇が無いですもの。」

鶯「ア、なせ俺は這麼頭になつたのか……モウ思ふまい〜。」
以前の窓より向を見て、

鶯「オヤツ？ 薔薇もなし、左の窓もめめ、人影も見えぬは……ハ
テナ。」

此内輦音お宮何やら耳語居たりしが、輦音フト勝の置
忘れたるステツキに目を着け、鶯あはて、拾ひ上げ己
の後に隠すを鶯郎見つけ、ヅカ〜と輦音の側へ來り、
鶯「何だ今お前の隠したのは。」

お宮輦音の後に廻りステツキを受取り己の後に隠す。

七二

輦「何も隠しはしませんわ。」

鶯「手を出して見せろ。」

輦音兩手を出して見せる、此中お宮そろ〜ステツキ
を隠しながら、下手に行きかゝる、鶯郎見付けて大聲に、
鶯「お宮待て！」

お宮あはて、鶯郎の方を向き猶ステツキを隠す。

鶯「お前一寸手を見せろ。」

お宮右の手を出し、左にてステツキを押へる。

鶯「左！」

七三

左を出し右を後へ廻す。

驚「両手！」

ステツキを腰に立掛け両手を出す。

驚「一寸此處へ来い。」

宮「イエモウ此所で澤山でムい升。」

驚「お前は澤山でも俺が足りん、来いと云つたら来ないのか。」

お宮止むを得ず少し前へ進む、ステツキ倒れる、驚郎急

いで取上げ見て

驚「何だ此櫻のステツキは。」

宮「ソレハその……」

斬「お前は黙つて……」

驚「イヤお前はおしやべり。」

宮「是も今日旦那様の御誕生日の御祝に奥様がお求めなす

つたのでムいますよ。」

驚「ナニ是も俺に祝ふ積りで……本統か斬音ぢや無い斬立。」

斬「全くなのですよ。」

驚「ソウか。」

ト嬉しさうに見る内、先の方へ目を付け又もや恐しき

顔をして、

鷗「コラッ！人に物を呉れるに事をかへて先に土のついて居る古ステッキとは何事だ……向の家は無線電信を取り方付けた様子と云ひ、先刻お宮の一言から此ステッキの事といひ、扱てはいよ……兩人共謀して詐偽的天性を逞うし怪物を引入れたな。」

輒音お宮ブルブル慄へながら、

輒「怪物などは決して……」

鷗「エ、まだ……俺に隠すのか、今となつて卑怯な舉動、婦人

の天性を看破した鷗郎は最早三寸の舌を以て瞞着は出来んのだ、サア此上はいよ……オセロの再来と成つて不貞の妻の骨を碎き、不忠の臣の肉を食み、不徳義の標本たる彼のハイカラの生血を舐るから、申遺す事が有るなら今の中言ふて置け。」

宮「こんな事で私の肉を食べられたら、いくら肥つて居てもたまりません、私は五圓頂いてお暇を……」

鷗「エ、愠張るなッ！社會に害悪を流す不忠な奴は、息氣ある内は返さぬぞ。」

斬「貴郎どうか爲さつたのですか。」

鷲「耐へに耐へた鷲郎が憤怒も、最早絶頂に達したのだッ！」

斬「夫程御疑が解けませんなら、家中おさがし下さるとも、夫

れとも外にお氣の済む様に何なりとも爲さいましたな。」

鷲「ヨシ最後に及んで能い覺悟だ……念の爲め探して見る。」

ステツキを持たる儘怒の顔色、荒くしく下手前の入口

へ入る、後に斬音お宮顔を見合せ、

宮「大變な事になりましたねー奥様。」

斬「随分馬鹿氣で大變だわねえ、お前の肉をお喰べになるつ

て……」

宮「しかしあの御様子では丸でお喰べに成らない迄も、鼻の
先位はお齧りに成りかねませんね。」

此時正面入口より勝芳雄、銀の柄の細形のステツキを
以てあらはれ、一二度奥様くと呼べども聞えず、是非
なく恐く入り來り、

勝「奥様！」

斬音お宮兩人振返へり芳雄を見て、

斬「アラ、貴郎また入らしつたの？」

宮「貴郎こんな所に居らつしやると、それこそ大變でムい
すよ。」

勝「イヤ此所へ参つても大變かは知りませんが、一本でも失
なひますと二十五萬圓の損害があるステツキを、ツイ忘
れて参りましたから命懸で頂戴に出ました……」

順「御尤もですけれども、今其ステツキをオセロに遣つてし
まいましたもんですから、今がいまといつて……」

勝「ヒエーッ！あの二十五萬圓のステツキをオセロさんに
？ッ、ソレは大變、私の方はモウ一時間もすると熊が来る

のですから、其時一本でも足りませんと、實に私に取つて
は死活問題なのですから……」

宮「貴郎そんな事を仰しやつて此所に御出でになつてもお
生命が有りませんよ、先刻旦那様が火の様にお怒りにな
つて、貴郎の生血を御吸になるつて、今貴郎を探して居ら
つしやるのですよ。」

勝「エーッ？生血を？それは危ない……とはいふものゝステ
ツキが無ければ私は此先どうなる事か分りませんから、
そんな事を仰しやらずに何とか御配慮が……」

頻に押問答中、鷲郎聲を聞きつけ下手前の入口よりソ
ット出来り、夢中になつて談判中なる三人の側に寄り
立聞する、鞆音、お宮心付きキヤツと云つて飛びさがる、
勝は蛇に睨まれたる蛙同然身體凍みたる儘チリ／＼
と室に追はれ遂に正面下手安樂椅子の所へ來る、上手
に立ちたる室鷲郎は右の手を延ばして無言の儘着席
を勧むれども勝は聲をも出さず目ばかりパチクリ。

鷲『小聲にて掛けたまへ。』

勝無言にて慄へながら室を見詰める。

鷲『掛けたまへ。』

猶無言なるに耐へかねてか大聲になり、

鷲『掛けたまへ。』

同時に勝は電氣に打たれたるが如くアツと云つて安
樂椅子に掛ける、鷲郎は何思ひけん内ポケットより懐
劍を取出し鞆を拂つて改め又／＼ピストルを取出し彈
込を見て元へ納む此時鞆音お宮兩人芳雄の側に寄り
小聲に、

鞆『オセロですよ。』

勝「オセロですよ。」

勝「オセロですよ。」

宮「虎が生血を舐めますよ。」

勝「同じく口の内にて虎が生血を……」

柄「何とか仰しやい。」

勝「ナ、何んとか……」

此時鴛郎上手の安樂椅子に掛け、

鴛「サアお待たせしてお待遠でしたらう。」

勝「ド、ドウいたしまして。」

鴛「吾輩は當家の主人室鴛郎です、御用の趣を承らう。」

勝「いよ、く、氣味悪き思入にて、」

勝「ハ、ハイ……イエ……ソノ……誠に……ハイ……」

鴛「何だか分らんが貴郎が拙宅へ來られたのは定めし何か御用が有つての事だらう。」

勝「ハ、ハイ全く……全く夫れに相違ひありません。」

鴛「其御用を承らう。」

勝「ハ、ハイ……然しソノ……それが……」

鴛「ハ、ハア何か貴郎の一身上の事にでも就て他人の前では

話しにくいとでも言はるゝのか。』

勝「ハイ、非常にお話しにくいので……ハイ。』

鶯郎は後に氣を揉みながら聞居たる鞆音お宮兩人に向ひ、

鶯「お前等には用は無い奥へ行け。』

兩人ハイとは言ひしものゝ勝を氣にして立去りかねる、鶯郎之れを見て怒の聲を荒らげ、

鶯「行けと言ふたら行かんのかッ!』

聲に驚かされ勝迄も飛上り出口に向ふ。

鞆音お宮兩人上手奥の入口に入る。

鶯「コラくくくく君ぢやない、行けと云ふたは女共の事なのだ。』

勝「ハッ……然しお見受け申せば大分お取込の御様子ですか
ら又いづれ其中……』

鶯「お取込み? 誰が? 吾輩ならいたつて暇だから、遠慮なく
用を述べ給へ、サア承らう。』

勝止むを得ず再び椅子に着き、

勝「ハッ、では申上ますが……エー……實はソノ……』

時計を取出し見ては頻りに四方を見廻し逃道を探しつゝ話す。

鷺「キヨロくせずにお話願ひたい。」

勝「ハッ、實は今日急に上りました爲に、誠に突然でハイ……。」

鷺「ソレがどうしたのです。」

勝「ハイ夫れが……。」

勝「アッ！二十五萬圓！」

鷺「二十五萬圓？何うしたのです、サアくさつさと承らう。」

勝「イエ……ハイ……實は事の真相を詳にせんが爲には私の生立ちからお話しをせんと分りませんが、ソモく私は今を去ること既に三十年前非常に幼少の時に生れました者で……。」

鷺「生れる時は誰でも幼少です。」

勝「ところが私一人のみならず同じく先に幼少にして生れたる男三人、即ち長男を牛雄、次男を勝雄、三男を花雄と云つて四男即ち私が芳雄……。」（絶えず四邊を見ながら）

鷺「かつをかまぐろか知らんが一體君の用向は何かつ！」

勝「イエ、ソノ……用向を申すには是から申さんとお分りに成らんのですが、その長男の勝雄は……」

鷺「長男は牛雄と言はれたではないか。」

勝「へー？」

鷺「牛雄が長男だらうが。」

勝「イヤ長男は花雄二男が牛雄で三男が勝雄……」

鷺「何雄でもいゝが、それがどうしたのか。」

勝「それが今申す長男の勝雄丈は白石家を相續いたしまし

たが、二男花雄は赤星、三男牛雄は青柳と皆他家へ養子に

……」

室はいよいよチレ出し、

鷺「かつをやうしをで散々人を苦しめた上に、白だの赤だの

青だのペンキ屋の看板然たる名前を並べたとて到底記

憶は出来ません、一體君は何者で何用あつて當家に来ら

れたか言へるなら言つて見給へ！」

勝「ハッ、實は私はお向に居り升勝芳雄と申す小説家で……」

鷺「ナニお向に居ります小説家？（思入ありて）是りや面白

小説家なら小説家らしい名前が有らう、吾輩も近來大分

小説を讀んだから大概名前は知つて居る、君は何と云ふ名で書いて居るのか。』

勝『すみれと申升。』

驚『すみれ？知らん！聞いたばかりでもゾットする名前だが、どんな小説を書かるゝのか参考の爲承らう。』

勝『私は先頃迄英語小説の翻譯を。』

驚『英語小説の翻譯？……然らば定めし英語にも熟達して居るだらう、Do you speak English?』

勝『へー？』

驚『Do you speak English or not? Answer me at once!』

突然の英學試験に勝いよく狼狽し、

勝『ハイ……ソノ……』

驚『(大聲にて) Answer me in English!』

勝『イエース……ノー……全く……サンキューベリマッチ。』

驚『君に英語を話せるかと聞いて居るに、全くサンキューエリマッチとは何たる挨拶だ！此の如き簡單なる質問に對して皆無答辯も爲し能はざる程の學力で、或は微妙なる人情、或は複雑なる事柄を外國語獨特の味を以て書

き著したる小説を容易に翻譯などが出来るとおもふか、
第一小説家と稱しながらバタ臭き唐人の小説を只々字
引の力に依て我邦に紹介するの外君等の頭の中には種
は無いのか、小國たりとも我邦は二千數百年の歴史を有
し然かも充分發達したる人情風俗の國民の間に居つて、
何を苦しんで小説の種迄外國に借るのか、丸善で外國小
説が賣切れたら君等は一體何でめしを喰ふのかッ！』
勝『イエそれが仰の通り非常に六ヶ敷ばかりでなく、何處の
本屋でも買つてくれませんか、此頃は目下流行の家庭

小説又は戀愛小説を書きますので、ハイ。』

鷺『ナニ——？ 戀愛小説？ サア聞捨にならん、今少しく前へ出
給へ。』

勝『ハイ。』

勝氣味悪氣にだんぐ後へ下る。

鷺『前へ出給へと云ふに！』

勝止むを得ず少しく前へ出る。

鷺『サア今日吾輩が戀愛小説家たるすみれ君に御面會の榮
を得たは親の敵に遇ふたより喜ばしく感じるのだ、吾輩

謹んでお尋をするが君等戀愛小説家が我日本國を亡ぼすの人たるを御承知か？」

勝「國よりも自分の方が亡びさうで……」

「イヤ御存じなくばソノ譯を説明しやうぞもく今回新任文部大臣の發表せられたる青年風紀取締の訓令に何と有つた曰く「近來青年子女間に往々意氣銷沈し風紀頽廢せる傾向あるを見るは憂慮に堪へざる所なり」とある。即ち近來の青年子女の氣拔のしたばかりでなく、不品行の者が多くなつて心配だと云はれた極端なる例をいへ

ば即ち哲理を生嚙つて遂には人生問題に疑惑を生じ、宇宙を悲觀しては華嚴の瀧に飛び込み或は海老茶に戀したとか戀せぬとか恰も葛西の喧嘩同様戀問題から噴火口に飛込んで生きては心を焼き死しては身を焼く馬鹿も有る。此の如き傾のあればこそ文部大臣の訓令を見るにいたつた様なものゝ内に外に約二十億萬圓の借金を持つて年々一億萬足らずの利子を拂ふ我邦の大責任ある相續人即ち當時の青年に取つて恐らく是以上の侮辱は有るまいと思ふ。青年たる者大に奮勵して、一日も早く

悔改めざる以上は、或は文部大臣迄も憂慮の餘り遂に厭世家と成つて華嚴の瀧へ飛込まれんとも限らぬのだ。』

勝「誠に相濟ませぬ。』

勝「ハイアア。』

勝「然るに、ソノ依て生じたる原因を取調べて見れば、第一に家庭の不完全なると教育法の缺點も有うが、青年子女の非常なる好奇心を以て見聞する文藝演藝音楽又大に責任の有る所なのだ、即ち君等のかく所謂家庭小説戀愛小

説を讀ませては氣拔にし、又小説を脚色したる色氣違共進會然たる演劇を見せては骨抜にし、薄志弱行淫靡柔弱の徒を作りつゝあるのだ。故に君等が國を亡ぼす人と言ふたは過言では有るまい、分つたか！』

勝「ハイ……イエ……チト……」

勝「ナニ分らん？ コラ日清戦争近くは日露戦争はソモ何に由て勝利を得たと思ふか？ 鉞を棄て斧を抛て戦地に向ひ粉骨碎身帝國の萬歳を叫んで敵陣に突入し遂に世界に我國名を轟かしたる忠勇愛國の士卒は常に軍

談テロレン浪花ぶし等に依て忠孝義烈の物語を聞き、知らずくの間、に武士的教育を授けられてあつたのだ、然るに近來流行の戀愛小説を愛讀するが如き青年が一朝國家に事有つて起たんとする時に、星や董で一死報國の念が起きるかッ！淫靡の標本たる海老茶の腹から骨も血もある大和民族が再顯すると思ふのかッ！！』

勝「イヤ……何共……甚だ……お氣の毒で、ハイ……」

鶯「お氣の毒とは何たる事か？現に吾輩個人としても貴様の無線電信の爲に今や家庭に大波瀾を生じて居るのだ、

此上は國家の爲、我一族の爲、吾輩は一身を犠牲に供して社會に害毒を流す君を屠るから覺悟を爲たまへ。」

勝「ヒエーツ私をホフ、ホフ屠るとは？」

鶯「貴様一人を活かして置けば我妻女はいふ迄もなく、今後幾人の良妻賢母たる婦女子を魔道へ引入れんとも限らんから、社會の爲に此鶯郎が一身を捨て、貴様の命を今日只今絶つてやるのだ。」

決死の顔色にてポケットより懷劍を取出す、勝は驚のあまり突然正面の入口へ向つて逃出す、鶯郎追すがつ

て洋服の襟を引く、背の縫目ピリ／＼と切れ上着二ツに裂ける、勝は猶も夢中に室内を追はれキャツと一聲叫びながら又もやステツキを捨て、逃去る、室ステツキを拾上無念の思入。

驚「ステツキが殖ゑるばかりで又パチルスを逃したか、残念！」

ステツキ二本持つたる儘、勝の跡を追ふて出る。此時上手奥より柄音お宮、兩人物音を聞付け恐る／＼入來り、今しも鶯郎の出行を見て、

柄「アラまあ！」

宮「オヤ／＼大變に散らばつて。」

柄「何うにか成らなければよいがね——」

宮「此上はもう何うにもなりやうはムいませんわ。」

柄「大變だね——」

宮「大變でムいますね。」

兩人心配中、上手奥より勝、芳雄、二ツに裂けた洋服の儘、右手に寒竹のステツキを持ち、カラは外れ、襟飾は後へ下り、帽子を横に被り、凡て亂脈の體にて走入り、兩人に

突當り、三人一度に倒れる。

勝「オヤ、奥さん、大變、トト虎が生血を……生血を……」

斬「エーッ！」

勝「あぶ、あぶあぶ危ない……危ない。」

宮「あぶなければ何だつて又入しつたんですよ。」

勝「又二十五萬圓忘れた……二十五萬圓を二本……五十萬圓ステツキ……」

斬「ステツキなんぞは、一本も有りませんよ。」

勝「ヒエーッ一本も？ 大變！」

トまごご探す、此内表を氣遣居たるお宮あはて、芳雄に、

宮「貴郎大變！ 又お出になりましたよ。」

勝「ヒエーッ又オセロ……ステツキ……オセロ……虎……」

斬「ステツキどころでは有りませんから、何處からかお遁なさいませしよ。」

勝「ド、何處から。」

宮「モウ間に合いませんよ、早くお隠れなさいつたら。」
皆々あはてふためき室内を駆廻り、今にも虎の餌食と

ならんとする。勝は一度上手前の入口に入り又々ステッキを忘れたる儘靴を両手に持つて再び飛出し、下手前の入口へ走込む。此時正面入口より血眼の室鷺郎両手に一本づゝステッキを持ち走り、

鷺「戀愛小説は何處へ行つた。」

柄「戀愛小説とは……」

鷺「エ、とぼけるな！ハイカラの怪物は確かに此所へ入つたに違ない、日頃からお前は董が可愛く云つたが成程今更思知つたは、其可愛董をば今お前の眼の前で蹂躪

つて見せるから念佛唱へて待つて居る。」

室、正面入口に鍵をかけたる後、上手前の室内へ探しに入る。此時室内何か手當次第壊す物音聞ゆ、お宮は隙を見て下手前の入口に來り、勝を手招きす、勝帽子を落したる儘飛出しあはて正面の口へ向へども、靴音お宮、兩人の様子にて出られぬと知り上手奥の入口に忍ぶ、同時に鷺郎又ステッキ三本を握り出來る。

鷺「オイコラツ！此家は雨も洩らぬにステッキが洩つて來るとは何事だ、如何に今日は俺の誕生日でも二本も三本

もステツキを呉れる氣遣は無からう、それとも、人をよい
よいとでも思ふのか。』

鞆音の部屋を見て、

驚「ハ、アさうだ。」

と、うなづき下手前の口に入り、又々烈しき物音聞ゆ、此
時勝部屋の戸を開けて顔を出す。

宮「早く〜。」

勝片方の靴を落したるも知らず飛出す、同時に室の出
来る様子を見卓子の下に這込む、室又もや帽子を握り

あらはれ、

驚「此帽子はソモ〜誰のかッ！」

宮「そ、それは、旦那様の……」

驚「ナニ俺の？」

被り見れば小サ過ぎて頭の上にチヨボツと乗る。

驚「こんな小さな帽子が何で俺のか、それとも俺の頭は怒の
爲に急に腫上つたのか、エ、斯迄證據の出で居るにまだ
パチルスが見當らぬは、星や莖の世となつたか、エ残念な
ッ。」

小さい帽子を無理に被りステッキ三本小脇に上手奥の入口へ走入る。始終卓子の下に聞居たる勝はまたまた手袋片方落したる儘這出し、室内を走廻る、轡音お宮あはて、勝を下手奥の口へ押やり、

宮『臺所口からお逃げなさいよ。』

轡『早く〜。』

勝両手を合せ兩人を拜んで一目散に逃出す。室は又もや靴をステッキの先へ挿し、振廻はしながら夜叉の如くになつて出、

二一
『サア今度は靴が出た、いよく足が付いて来たぞ。(室内を見廻し)』

『サア出るハイカラ、日本人なら此處へ來い、此鴛郎の爪の先から逃れやうとてさうはいかんぞ。』

帽子の中へ靴を押し込み室内を探し卓子の下より手袋を見出す。

鴛『アッ！手袋！残念！』

靴の中へ手袋を押し込み屏風の裏、椅子の後など探し遂にステッキを以てストーヴの穴を探り顔迄入れて見

る、額鼻の先等に煤つきて一種異様の顔色となる。

鷺「ヨシ遁げ居つたな、此上は鳥となり土龍となり、天地を分けても探して見せるぞ。」

留める轆音お宮兩人に尻餅を搦かせ下手奥へ迫て入る。

宮「尻餅のまゝ奥様！」

轆「同じくお宮！」

宮「どういたしましてうね。」

轆「モウ知らないわ。」

此時以前の窓より勝顔を差入れ、

勝「奥さんく。」

轆音振返り、

轆「アラッ又！」

宮「ソラ又始まつた！」

勝「オセロさんは？」

轆「今貴郎を探しに外の方へ出ました。」

宮「早くお遁にならないといよくお命は有りませんよ。」

勝「二つに裂けた洋服を後前に着し背にてボタンをか

け片方靴を穿き窓より入來り、

勝「ステツキー！」

柄「またステツキー？」

勝「又々ステツキー、都合三本、七十五萬圓御返し下さい。」

宮「三本とも旦那がお持になりましたよ。」

勝「ヒエーッ！三本共？ア、ー！」

力抜けて椅子にかゝる。

柄「何共申譯が有りません、是と申も私が手紙を上げたから起つた事ですが、私から二十五萬圓お返へし申す事も出

來す……」

柄「音氣の毒のあまり涙を催す。」

勝「イヤお泣き下さるな、御親切は有がたうムいありますが、其涙を頂いたところで二十五萬圓を恢復する譯にも行かず、今迄生延ましたのが何よりです、此上は私も不運とあきらめまして傘問屋の熊の方も逃れたいと思ひますが、何分此姿では外へ出られませんか、せめて帽子に靴と上着丈け一時拜借が願ひたうムい升。」

柄「私もあんな格氣深い虎の様な人の側に居りますと、此先

どんな事が起らないとも限りませんから留守の間を幸
ひ是から里へ歸り升。』

宮『私も五圓位には代へられませんか、奥様と御一緒にお
暇をいただきます。』

勝『一時一刻を争ひますから何分お早く。』

朝『では、室の部屋へお出下すつて靴でも着物でも御隨意に
お持下さい。』

勝『宜しうムいますか？』

朝『エ、く、一向差支ませんから御随意に。』

勝『では御遠慮なく。』

朝『私も仕度をいたしますから御免下さいまし。』

勝は上手前の入口、朝音お宮兩人は下手前の入口に入
る。同時に上手奥より鶯郎飛出し、

鶯『居らん！實に不思議だ、オヤ朝音もお宮も見えんな……ハ
テナ。』

上手前の入口に近づけば内にて物音聞ゆ。

鶯『オヤ誰か居るな。』

鍵の穴より覗き二三歩下り、

驚「是は怪しからん、パチルスが俺の洋服を着て居る。」
又もや下手にて物音聞ゆ。

驚「オヤッ！」

下手の口を覗き、

驚「アッ！ 鞆音も仕度を……さては驅落だな、ヨシ〜。」

勝の落したる品々を卓子の下に隠し懐劔片手にスト
ーブ前なる虎の皮の敷物の下へ隠れる。此時勝芳雄
耳が無ければ鼻迄被れさうなる鴉郎の帽子を被り體
に合はざるダブ〜の上着、同じくブク〜の靴を着

用し出、鞆音も外出の用意を整へお宮に大きなカバン
を引ずらせ出来る。

鞆「御用意が出来ましたか。」

勝「ハイ少し似合ませんが是を拜借いたします。

併し人間といふものは何時何で損をするか分らんもの
で、今朝始めて御手紙を頂きます迄は只お噂ばかりで、つ
いぞお顔をさへ見た事の無いあなたから、お間違とは申
しながら薔薇や烟草や左の窓でお小言を頂戴いたしま
して、夫れからといふものは只理窟も無く御主人のお怒

に觸れまして遂に養子先も絶望となりましたのは實に前世の因縁とでも申すのでせうな。」

勝「モウどうぞ何にも仰しやつて下さいな、今日始めてお目にが、つた貴郎に、主人の嫉妬からとは申しながら危い目にお遇はせ申しましたのは實に何共お氣の毒な事でお詫のいたし様もムいませぬ。」

勝「イヤ命だけ助かりましたのも御兩人の御配慮からで何共御禮の言葉もムいませぬ。是と申すも畢竟慾の爲に養子になる様ナ考を持ちましたから這麼事になりました

ので、以來は田舎へでも参りまして猶充分眞面目に文藝の研究でもいたしまして獨立で生活をいたしませう。」

瓶「私も決して去りたくはムいませぬが、命には代へられませんからお宮を連れて里へ歸ります。」

勝「夫れでは角迄お供をいたしませう。」

此對話中虎の皮の下より首丈出し委細を聞居たる鶯郎、顔の汚れたるも懐劍を持ち居る事も忘れ、虎の皮を被りたる儘、立上つて兩人の間に入る。一同之を見て、

一同「ソラ虎が？」

と逃出し諸方へ隠れる、鶯郎己の姿に心付き虎皮を脱ぎ懐劔ピストルを投出し、

鶯「すみれ君、鞆音、お宮もう分つた俺が間違つた出て来てくれ。」

三人鶯郎の様子を見て半信半疑隠れたる場所より出る。

鶯「此通りモウ大丈夫だ董君、實に面目ないが、今此所で立聞ではない寝聞して居ると、皆僕の思慮であつた事が分つた、何共申譯が無い。」

勝「それでは命はお助け下さいますか。」

鶯「無論の事です。併し戀愛小説だけはお止めを願ひたい、それに鞆音もお宮も色々氣をもまして濟まんかつたが里へ行く事は思止つてくれ。」

鞆「それではお疑は解けましたか？」

鶯「解けたばかりでなくキレイに流れ去つた。」

宮「では御約束の五圓は。」

鶯「ソラ此所に。」(五圓を渡す)

勝「拙者の二十五萬圓三本は。」

驚「此通り皆お返しする。」

ステッキ帽子靴手袋を渡す、勝ステッキを握つた儘、安心のあまりペタ／＼と坐る。

驚郎靴音を引寄せ、

驚「ア、今迄は忌はしい夢を見て居たが、是からは楽しい夢を見ませうね……」

(幕)

劇喜 新 才 七 口 終

一三四

明治三十九年九月廿九日印刷
明治三十九年十月三日發行

定價金卅錢

著 者 太 郎 冠 者

東京市神田區表神保町二番地

發 行 者 岡 三 郎

東京市小石川區久堅町百八番地

印 刷 者 吉 見 繁 藏

東京市小石川區久堅町百八番地

印 刷 所 博 文 館 印 刷 所

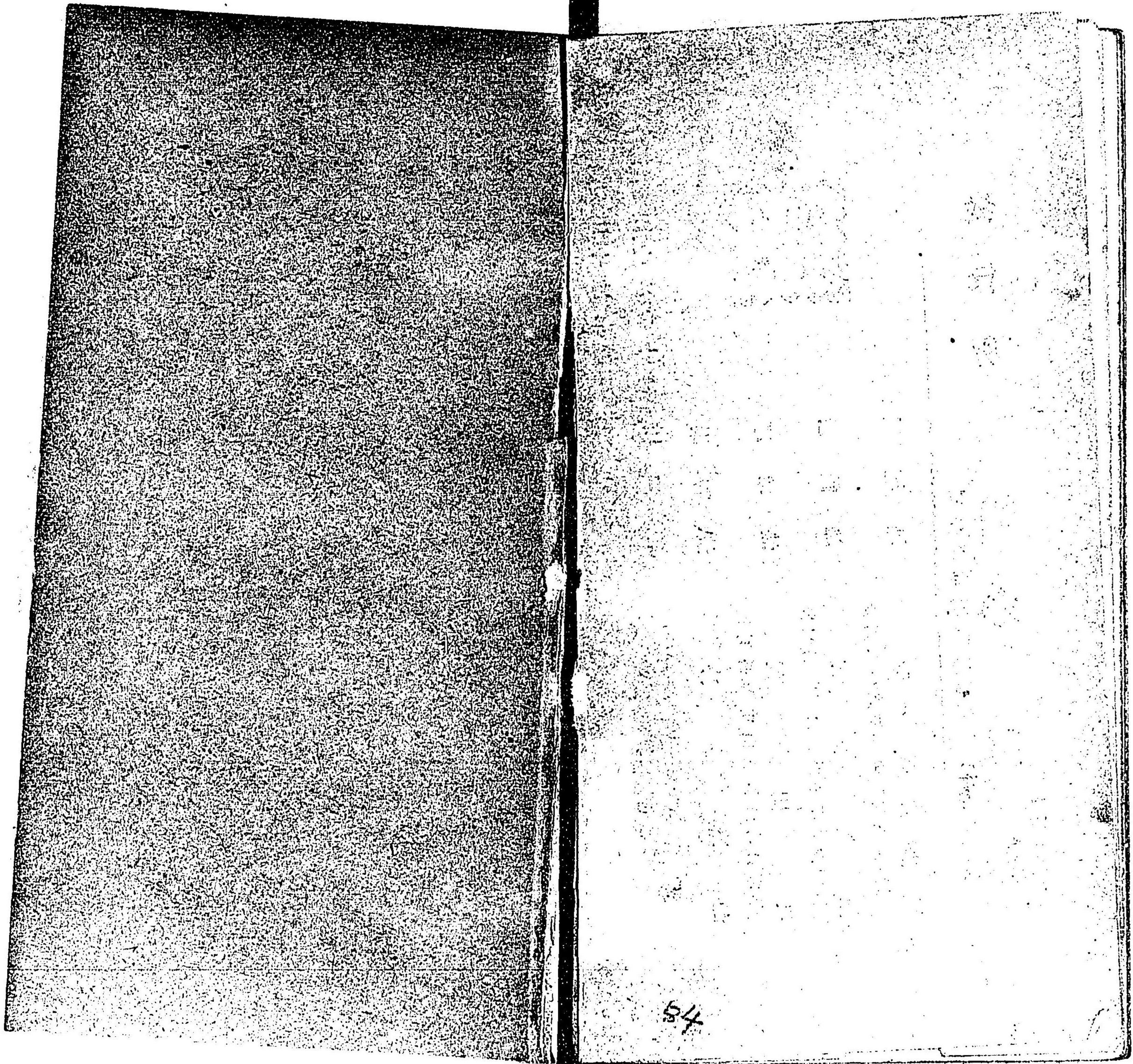


發 行 所

東京市神田區表神保町二番地

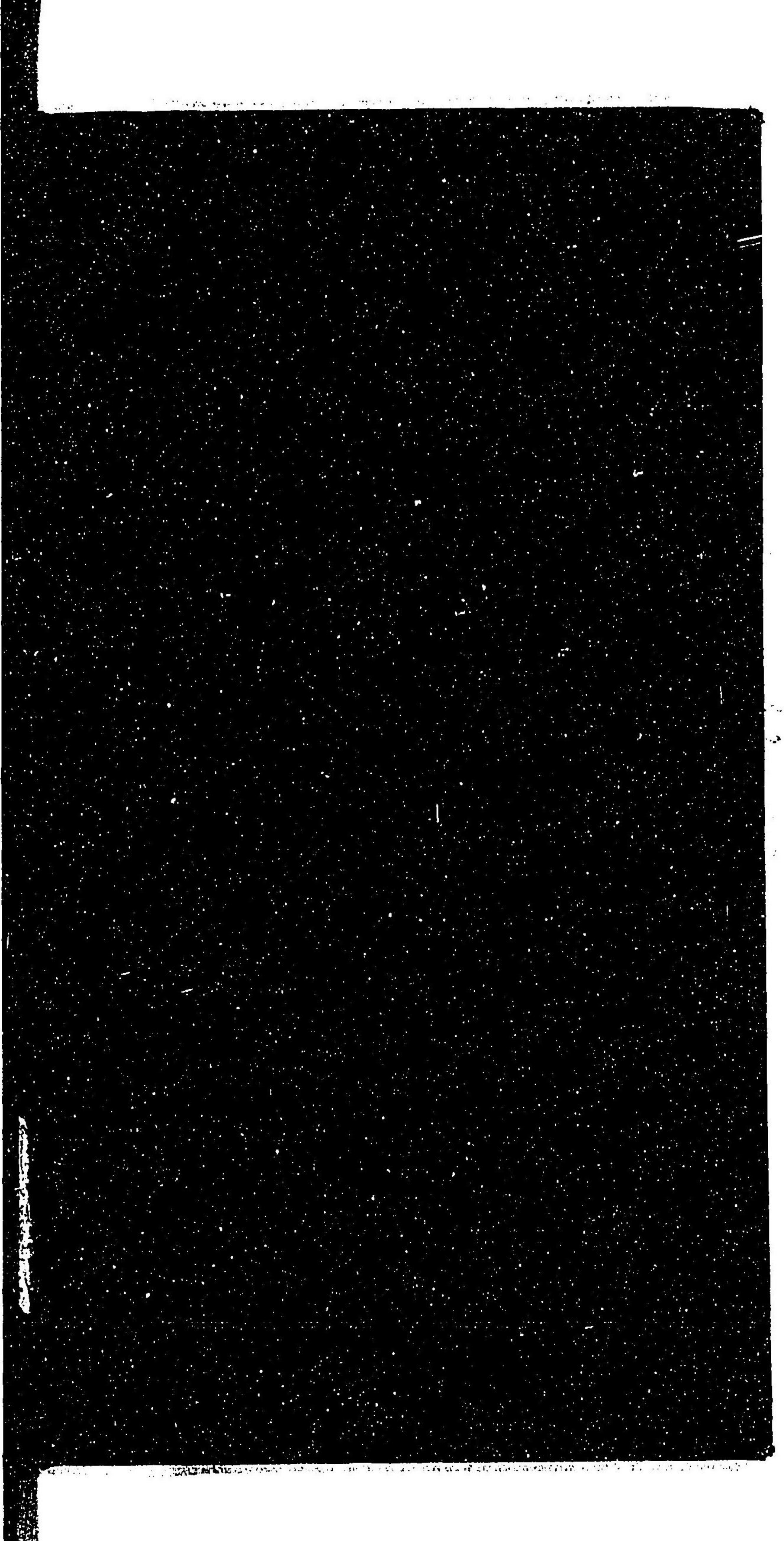
彩 雲 閣

(電話本局 一六一八番)



54

32
300



32
300

088870-000-2

32-300

新才七口

益田 太郎冠者 / 著

M39

DBK-0053



